

文化五年 高松公祐記

まえがき

ここに紹介する史料は高松公祐の文化五年頃の日記の一部である。私がこの日記を入手した経緯は、先に私たちが整理した大津の三井寺塔頭普賢堂の襖下張り文書に関する記事が朝日新聞紙上に掲載されたことが契機となつて、大阪府和泉市和田町の森富貴子氏から朝日新聞大阪本社編集委員高橋徹氏を介して私に届けられたものである。森家は四代以前まで現在の京都市中京区寺町通二条上ル要法寺前町七二四番地に居住し、「経六」（経師屋六兵衛の略称か）を屋号とする御所出入の経師屋であ

仲村研

つたといわれている。先代が京都の家宅を放されたということがあるが、経師屋時代に襖、屏風などの下張り用に収集、備蓄した和紙のなかに、この高松公祐記があり、台風に遭遇したり、また家人に燃やされそうになつたりして辛じて現存するに至つたということである。

高松公祐の高松家は、藤原北家閑院流で三条西家庶流武者小路家の分流として享保十年（一七二五）に、以前中絶した高松家を再興した。公祐は再興された高松家の四代目にあたり、権中納言にまで昇進した。高松家は歌道を家業とし、公祐は「後撰和歌集抄聞書」（宮内庁書陵部蔵）、「高松公祐詠」（宮内庁書陵部蔵）、「松葉集」

（静嘉堂文庫蔵）を著している。いま『公卿補任』によつて公祐の履歴を紹介しよう。公祐は安永三年（一七七四）十月九日、正三位高松季実を父として生まれ、同年正月二十八日、五歳にして従五位下に叙され、天明七年十月二十九日、十四歳で元服し昇殿を聴され、同日従五位上に叙された。寛政元年（一七八九）五月二十二日、十六歳で刑部大輔に任ぜられ、同八年四月二十四日、二十三歳で正五位下に叙され、同十一年二月三十日、二十六歳で従四位下に叙され、同十二年三月二十六日に儲君（皇太子）親王家の家司となっている。享和元年（一八〇一）八月十日、公祐は二十八歳で右近衛権少将に任ぜられ、翌二年十月五日に従四位上に叙され、文化二年（一八〇五）正月二十六日に三十二歳で正四位下に叙され、同七年九月二十三日、三十七歳で左近衛権中將に転じ、同年十二月二十一日、従三位に叙された。文化十二年（一八一五）二月三十日、四十二歳で正三位に叙され、天保二年（一八三一）九月二十日、五十八歳で

非参議から参議に任ぜられた。天保三年正月二十日、参議を辞退し前参議として散位となり、天保六年十二月十八日、従二位に叙されている。弘化元年（一八四四）十二月二十二日、公祐の息季実は三十九歳で従三位に叙されている。季実の母、すなわち公祐の妻は前中納言滋野井冬泰養女（前権大納言滋野井公麗女）である。嘉永二年（一八四九）五月九日、公祐は七十六歳で権中納言に任ぜられ、五月十八日にこれを辞し、翌三年十二月十二日、七十七歳で正二位に叙された。翌嘉永四年（一八五一）七月十八日、高松公祐は七十八歳で薨じた。これより先の嘉永二年十月二十四日、季実は四十四歳で正三位に叙されている。この日記が記されたと思われる文化五年（一八〇八）に公祐は三十五歳で従四位下行右近衛権少将であった。

高松公祐日記は公祐の詠んだ和歌の紙背に記されたもので、紙は縦三三・五センチメートル、横二二・八センチメートルで袋綴じにしたものである。

森富貴子氏から私の手元に届けられた十七丁の公祐日記は、丁表の端下に黒い木綿糸で丁がはずれないように綴じられていたが、本来は、丁を綴じる穴が上下四か所にあるから、この穴に綴紐が通されて冊子状になっていたと思われる。そして丁の順序は、綴紐が切られてばらばらになっていたものが、仮に木綿糸で綴じられた状態であるから、時間的に並びかえねばならない。全体としては文化五年の日記であることが判明するものの、月の記入を欠いているために、正確に配列することは不可能であるが、凡のところ次に紹介するようになった。そこで改めて丁の順序の数を「第一丁表」「第一丁裏」のように表記することにした。そして、丁数が変わるところで連続するところは、何事も記さないが、明らかに断絶しているところではその旨を表記しておいた。たとえば、第十一丁表に「付烏黄門許詠進之」とあり、烏丸資董が黄門、すなわち、中納言になるのは文化五年後六月八日であるから、第五丁表の冒頭の「廿日、晴」は、六月二

十日を含む、それ以後の日付であることがわかり、また第十三丁表の日野西右大弁延光が右大弁になるのは、文化五年六月十三日であり、それ以後の日記であると判断され、またその中に高辻福長の十二月二日付書状が引用されているところから、この丁は文化五年十二月二日以後の日記であるとしてよい。年月の考証が不可能な丁もあるが、後日の考証に期すこととして、考証不能ではあるが一括できるところは序に配しておいた。

先述のように、日記の紙背は月次の歌会で詠んだ歌が記されており、歌は寛政十一年（一七九九）、同十二年、享和元年（一八〇一）の日付で刑部大輔時代と、右近衛少将時代のものである。紙背文書としてだけでなく、日記の中にも随所に公祐の詠んだ歌が記録されている。いづれも定形化されているので新鮮さはないが、近世後期の宮廷歌人の歌感覚が読みとれるであろう。また年中行事における有職故実の記載は、中世から近世初頭にかけての公家の日記に記されたそれと比較すると興味深いも

がある。とくに行事参加人員の衣装や調度品の書上げ

は、同時代の公家の記録とともに貴重である。中世公家

の日記の活字化に比較すると、近世公家の日記の活字化

は意外に少ない。わずか十七丁の公家日記の活字化では

あるが、この高松公祐記を通じて、近世公家の生活――

歌道、宮廷雅楽、有職故実など――の一端を垣間見るこ

とができる。この文化五年の高松公祐記について専門家

のご意見を伺うことができれば、紹介者としてうれしい

ことである。

最後にこの日記を提供していただいた森富貴子氏と、

これを私の手元に届けていただいた高橋徹氏に深甚の謝

意を述べる次第である。

(第二丁表)
文化五戊辰年愚記 正四位下行右近衛権少将藤原朝臣(花押) 五十

正月小 中宮非常供献物舟橋三位被催之、年礼音信在別帋、

一日、戊戌、時々雪散、諸拝祝着如形、吉書試筆、齒固、屠蘇、書見始、是亦如例、

已許、衣袍奴袴、詣吉田社、次若宮、次斎場所了、参中宮表使、親王同申之、帰路所々年礼罷向、午後将向年礼了、
凡六七十軒

内侍所御供米申出上二十疋、兵衛之頭へ送使、

今夜節会於九条殿、以諸大夫申置、不及御祝也、二条殿取次、三条亭相模介、且旧冬ノ花岡権介一件、更不克所存旨申之、

不参 陳後早出 不参 陳後早出 前秀 統内弁 無御出之、奉行重能朝臣、

左大臣 右大臣 内大臣 権大納言 中宮権大夫 今出川大納言 権中納言 花山院中納言 新

中納言 寛季 菅宰相 為清 宰相中将 実誠 右大弁宰相中将 国長 右京権大夫 光通 三位中将 輝弘 勘ヶ由長官長親

次將左 和通朝臣 (朝臣) 通典― 実揖― 不參 為脩― 恭通 右隆純朝臣 公師― 具集― 供秀― 宗職―

二日、己亥、陰、自早朝向年礼布衣凡五十軒計也、十二銅 下御靈、(御靈) 上― 十疋、革堂十二銅等代參、自中宮大夫状来、内談事也、答愚意之赴、

三日、庚子、属晴、三ヶ日祝着之儀如例年、午許参院布衣奴袴、近習 二四六番之輩集会、自番頭以書付被申、評定暫而被示云、有御用無御对面云々、頂戴御祝三献等御礼、自第一献奉行へ被申、各分散于時未刻計、

閑院宮へ以使者伺初春之愚詠、御万見明日已計申出度申、御留主云々、回文云、

就宰相典侍昨夜子刻、姫宮御誕生、御所之御座所等へ一兩日中參賀可然、(初九) 且小番未勤、親族中へも可申伝旨、清閑寺前大納言被申渡候、仍早々申入候也、(第二夜) (通定) (四糸)

正月三日

隆師

右之通被参候、仍申入候、御廻覽後可返給候也、

同日 (三糸) 公修

菅宰相殿 (五条為徳) (甘露寺國長) 右大弁宰相殿 園池三位殿 (公卿) (上冷泉為則) 左衛門督殿 高松少將殿 承候、 藏人左少弁殿 越前権介殿

四日、辛丑、属晴、

昨夜回文云、

上分刻限可為辰剋候、無遲候、可令参集給候也、

白馬節会可令佑陣給被別行仰下候、宿帚弘底之間、先内々申入候也、

正月三日

中院中將殿(通祖)

今城中將殿

四辻中將殿(公祐)

小倉中將殿(豐季)

高松少將殿奉(公祐)

東園少將殿

野々宮少將殿(定業)

石山少將殿(篤經)

武者少路少將殿

水無瀬少將殿

仙洞・中宮・姫宮、勸修寺家等今朝参賀、次参賀内初番受取、中宮大夫被差替、仍所早参也、奴袴、姫宮降誕ノ御

祝付帳面、且中宮大夫依飲樂、以公祐被申上赴(趣)、所々ニテ申之了、当番参否、惣請参否等之書付予書之、於建房ハ

依院ノ御礼遅参、其由言上之、

付本番所着到

公祐番 番衆以表使初番御礼申、於表御祝被下之、

伝奏ヨリ

外様触云、宰相典侍局去二日子刻安座、姫宮降誕之間、為心得申来云々、

御内会始、来廿六日可詠進、番々有触題春雪有松、

今朝弄宮ヨリ申出之、
初春之詠艸豎帟伺之、即日賜勅旨、有宸翰之御祝言、題拝戴前後届議奏、

(紙背文書)

一 春日同詠春曙眺望

和歌

右近衛権少將藤原公祐

いはみかたなきたるは

るのあけほのゝなみ

まにしらむたかつの

のやま

└

(第三表)

申刻計、外様衆御礼有、御対面小御所如例相詰之、

自三条中宮大夫状来、(公修)白馬御点被題入候、夫ニ付舞妓催促之事、歛衆之間、名代被憑度云々、奉書四折、

白馬節会舞妓

催之事

如之被書付来、仍以表使長橋局へ付之、如例、舞妓催之義、(三条公修)三亞依歛衆、下官名代ヲ以申状命之所、落手之由有返

事口答也、前後不及議奏案内、

長橋

尤承諾之赴、(趣)三亞へ申達了、

宿直祀候、外様衆御銚子出座、公卿二献肴加へ、又一献雲客、二献肴、又一献無加へ、

五日、壬寅、陰、

ワズシ

渡相勤退出、参二条殿、白馬候陣之義届申、九条殿へハ以使申入、三条へハ亜相へ以状次申送、

(鴻虎鑑房)
池相公、

梅武衛、倚松軒等入来、対面各年礼也、今日披露始、十二人位階宣下云々、

六日、癸卯、陰、浴湯始、

春情処々多

右和歌題、来十八日御会始可有披講、可令予参給之旨、
院御氣色候也、

正月五日

(広權)
胤定

(第三裏)
油小路前大納言殿

当日已刻迄御詠進之事、

高松少將殿
(公祐)
奉

冷泉大夫殿

就来八日、姫宮御七夜、御所々々御産所等参賀之事、

当日、禁中 姫宮等、右干者一折干鯛(物) 献進之事、
五枚宛

重服者来十日参賀可然、尤不及献物候事、

右六条前中納言被申渡候、且小番未勤親族中江茂可示伝、同卿被示候事、

近習一統献上催、禁 右衛門督、姫 式部權大輔

右領掌候、仍申入候也、正月五日
(花山院)
家厚

右之通被示候、仍申入候、一統被献候哉、承度候也、

正月六日 (三条) 公修

菅宰相殿

高松少将殿

越前権介殿

承候、統
立被入候、

願御廻覧可返給候也、

風早越前権介へ明後日参賀名代憑申領状也、

七日、甲辰、晴、時々飛雪、(カ)早旦頭弁亭へ差出奉書四折礼帋美乃、

白馬宴会可令候陣之处、夜来歡樂之子細難相扶候間、不立参陣候状、宜預御沙汰候也、

正月七日

公祐

頭弁殿

依参 内於彼被諾云々、抑参仗不参、(使カ)今日初度也、雖残懷依服瀉也、

(紙背文書)
春日同詠二首和歌

右近衛権少将藤原公祐

野遊絲

はる深き野へのみとりの

草のうへにをちこちもゆる

いとゆふのかけ

片恋

なへて世のならひもしらぬ

ころかなしゐても人を

したふおもひは

└

(第三表)
文化五年三月
二日、戊戌、晴、入湯、

自世統甲斐守状云、明後日與丁何時ニ可廻哉、且添使交名申来、

中宮取次所遣使云、與丁之義、於此方昼食無設之間、食事早仕、已半比ニ可差越申遣承諾也、

豊岡左馬權頭入来、明後日自親王儲君閑院宮へ御使被承、万端中宮御使ノ格可聞云々、則諷諫了、且借送誰ノ掛物故応奉

画、

明日雜人共富小路(貞直)へ致入魂処、至今日断故、更姉小路へ誰人共答合、頼遣領状也、

芝山(持豐)へ明後閑院宮へ御使主従飯有無尋遣処、主人へハ被出家来之所ハ、大方不被出候半、但未知云々、

今朝自中宮芝山被申送云、明後日已刻ニ中宮へ向ヲ可参、禁中御伺居之云々、被申答之、承諾候、但禁中御使遅参不苦由、議奏被噂朝答旨、伝承間参宮云、依躰彼は遅参ニ相成候半、即予申入、

●三日、己亥、陰雨下、音信在玄関日記、

早速参賀禁中 仙洞 中宮親王へも御帳ニテ済殿下、二条殿、九条殿悦了了、於今日誰答合姉小路大夫人共献上了、

丑刻計火事、上御靈別当宅云々、参中宮各以表使伺親王同断、事終

(第三十夜)
退出義御肝煮被参、分散于時寅刻、

●四日、庚子、時々微雨、及夕属晴、自今日嵯峨祇尊於三条檀王法林寺三十ヶ日開帳云々、然来七日戌刻、抑本札証(遷)迂宮、

自五日晚到八日朝、洞中御神事候、

三月三日

右之通——三月四日

(三条)
公修

(桑原為弘)
菅宰相殿——高松少將殿承——

中宮御有卦献物日限之事、来八日可然之旨、芝山前黄門被告承候、其旨御存知可給候、仍申入候也、

三月六日

(右井)
行宣

(鯉貫)
舟橋殿——高松殿承候、——

早旦、閑院宮へ御御太刀一腰馬代銀十兩一疋高松少將、御馬代銀十兩不乗台進之、後刻参入之節、可披露申遣、
使へ御祝酒赤飯引出銀一兩被出、且御返答口上アリ、

已半刻過参中宮、衣冠薄色奴袴、網代輿四人、先供二人、輿脇二人、杓持・笠持・笠籠持前後芝山宮内大甫親王有栖川院宮へ御使也、中宮有宮へ、親王、閑院宮へ也、大宮侍從有宮ノ御使被承、芝侍從豊岡権頭等参集

大藏卿被謁閑院宮へ御使之口上御目六等被渡、品点檢、こんふ 一はこ ひたい 一はこ 御たる 一荷、取次戸田伊勢守出逢、輿丁之御礼申、添使清水左兵衛尉呼出、目六為見、則渡之事等如例、大宮侍從有宮ノ御使被承、芝

山宮内・豊岡左馬於自三卿御使被承、各予諷諫了、

〔紙背文書〕

秋日同詠三首和歌

右近衛権少将藤原公祐

松下擣衣

山さとはのきはにたえぬ
まつかせのをとさへ寒く
ころもうつなり

紅葉秋深

ゆふ日さすこすゑのあきの
もみちはゝしくれし程の
色も見へけり

後朝増恋

あひみては消もはつへき
身の露のけさしもなとか
をきまさるらむ

(第四十表)
五日、辛未、晴、

受取番参内早旦、東本願寺参入致取次、肴到来、

廻文云、

一御内会題、春草、浦風、来廿六日如例可詠進事、

一来八日已刻、春日社并若宮正遷宮日時定陣儀ニ付、自七日晚到八日午刻、御神事候、御相番中且小番未初之、親

族御神事可被参伝候也、

二月三日

右之通——

二月四日

公修

今日院御幸於禁中、

●六日、壬申、晴、

渡之後退出、

外様触有、八日之御神事廻文、

自閑院宮田中木工権頭状云、八日御当座被催間、午刻後可参云々、

●七日、癸酉、晴、

(第四十表)

●八日、甲戌、雨下、

春日并若宮正迁宮日時定陣儀、上卿(胤定)広橋大納言、

尹宮御当座始、依用事不参、題申出忍恋、且小野蘭山八十賀哥入見参、明夕可申出願申、

自禁裏、賀茂御法案題(甘露寺)国長卿被触来十九日云々、

●九日、乙亥、属晴、入夜小雨入湯、入夜倚松軒入来、

●十日、丙子、陰晚雨、入夜子過地震尹宮へ以使一昨日ノ哥申出、且一昨日ノ御会哥伺之、
晚景向倚松軒所留守也、

●十一日、丁丑、属霽、唯飛雪当番依所勞不参風早、今日中丁云々、
當時住關東物産之名入小野蘭山八十賀、実子大黒越後椽勧進、以承知也自倚松軒詠哥所望之間送之、

短尺打置金泥引、

あまた年とめきてちくさ万木の

うへにもちきれ老のはる秋 公祐

伝聞、頃之近衛内大臣卿、(基前)令娶尾張家之息女給云々、

〔紙背文書〕

冬日同詠三首和歌

右近衛権少将藤原公祐

寒鴈

霜寒きそらにしほれむ

鴈かねの翅のほとを

おもひこそやれ

窓雪

まとちかき一むら竹の

すえふしてつもれハ絶ぬ

雪折のこゑ

海人

わかめかりしほくむ浦の

あまこそもいつかたもとの

しほれさるへき

〔第五丁表〕

屋後参、尹宮無御対面点給、即清書、

花雪

ふまハおし風のまに／＼ちる花の
ゆきこそ匂へしかのふるミち

公祐

向花山院、自清凉寺所望之額三通賴置、(依留守諸大夫へ附当月中可申出事、)次向池尻(前相公留守奥方已下面会、)交野亭上已返礼申置罷帰、
弥御安全珍重存候、抑九条殿昨日自左府殿舞踏御伝授相濟之由、以御使被仰聞、貴卿申合、御門流申伝候処被命候、
毎々乍御世話宜可申入候、(鷺尾羽林へ)自隆前卿申伝候、勿論隆道へも可申聞候、左思召可給候、万々期拜面品々
申残候也、

三月十一日

甘露寺前亜槐公

隆前

右書中到来入御覽候、別紙御方々御廻覽可返給候、国長申聞候也、

三月十一日

(甘露寺)
篤長

唐橋式部大輔殿(在熊)

高松少将殿

沢武藏権介殿(久重)

倚松軒入来、

十四日、晴、風寒、入湯、伝聞、今日隆純朝臣輔藏人頭、去十日重継朝臣任三木替也、
(當尾)

●十五日、晴、

今日於御学問所前庭、舞楽御覽也、惣詰雖被触、称所勞不参、陪膳又同断、

今日惣詰因所勞不尤参勤候、宜願御沙汰候也、近習御当番中(延理)
園落手、

今日陪膳御用、依所勞不参候、宜願御沙汰候也、御献奉行御参中(有政)
千種落手、

昨日自中宮大夫以狀被尋合、今日於不參者、切帛議奏或近習歟、予答云、恒例之総詰之格ニ取扱、近習番衆へ可差出覺悟候也、

去寛政八年三月御有卦之砌、十五日舞樂、南殿但今年早春、
（ママ）
惣詰自議奏被触、当日近習へ不参書差出。依雨延引翌日、

於翌日者當番惣詰非番推参不及斷書、
是昨日依御祝之酒宴御園給物等有之歟、

去寛政十年八月舞樂小御所近習惣詰院祀候推参也、近習袴指袴也、其夜於御三間御酒宴、但本御酒宴者先日有之、
今夜近習不及一統雲客計為陪膳可然、
臨期有催指コニテ相濟、

今日御學問所前庭東處也、雨儀ナラハ御學問所与小御所之中庭設仮屋根、於此所可有之云々、目六尋取四辻前亜相、（公方）
於所作人者、後日自中宮大夫被注送、

参音双調々子 春庭樂 御學問所前庭天明已來無之、

一帖桃李花葛泰 近教 葛雅 近滿 好文 登天樂忠勇 文碑 廣範 桃李登天共片祖、午半計被始、申半過訖云々、

散手 近友 貴德 文行 散手 不具人從於幔側退紅者渡梓、
貴德 取梓手ヲ不舞而取之云々、
砂立之時ハ無人從歟云々、可考、

一帖甘州好古 葛雅 近滿 林歌廣勤 文碑 甘州（押） 揺頭桜作花云々、

二帖打球樂葛泰 近教 好古 狛梓廣好 文行 打球樂 無抹額

陵王則是 納蘇利廣勤 廣胖

玉自懷中出之、致空搔了、下 臍持入、
上首球打ヲ不掛肩シテ入云々、

退去音声 長慶子

左
笙

右
笙

〔紙背文書〕

稿日同詠名所七夕

和歌

右近衛權少將藤原公祐

あまのかは^はこもな

にあふわたりとやか^かた

野にほしのくれを

待らふ

〔第六十表〕

広秋^{音頭} 近能 忠堅 文秋 近信

筆 簾

光定^{音頭} 季文 近義 季良 季名

笛

但高^{音頭} 高美 忠得 時全 近尚

広武^{音頭} 広勝 久敬 広綱 忠恕 輝秋

筆 簾

俊元^{音頭} 文幾 忠同 久視 季随 季邑

季郭

笛

羯鼓 近寿

音頭
昌清 如貫 景和 昌実 忠暉

太 近周

三 鼓 昌芳

鉦 基寿

太 季政

正 広教

伝聞、今日惣詰衆切袴ニテ済云々、御祝等無之云々、

惣詰書付献上、新内裏初度云々、但迁幸之時有之歟、今夜御酒宴之御沙汰無之云々、先年ハ臨時有之之上ハ、座東面其左右

男方殿下尹宮聖門將繼役人近習ノ当番答、簀子、当番ノ雲客、陪膳ノ雲客云々、

北方女房見物所云々

其余撰家之方前内府惣詰ノ答、殿上人ハ小御所北面ヨリ見物云々、

参音声事、自山之南ヨリ御山ヲ経テ渡、蔦橋新石橋南池之北傍等列立于繼殿之前庭北方南方等に、舞所正面砂立、

楽屋。北東方、

退出音声事、自楽人之下臈退出、先正コ経本路、長慶子及五六反云々、

若於雨儀者、御学文所南庭ニオ井テ可有之、兼而設仮屋根云々、

十六日、陰、閑院宮ヘ以使伺申、愚哥下見公宴月次御内会、已上三通明午迄、

甘露寺右大丞相公ヘ古哥五枚書送(國長) 詞書二枚哥計三枚日光幣使所用ニ付過日依被頼也、

志摩守ヘ明後日之神膳申遣、

(第六丁裏) 嵯峨清凉寺釈尊、自去四日卅箇日於三檀王。一ニ開帳之間、立代参、備進伽羅一晷、且粽十把(川端)送之、
法林寺 名雲井校

近々御劍御服御用候也、

御用之儀候間、来廿一日已半刻御參可被成候也、三月十五日

高松少 承候、

(兼光)
裏松弁

入夜倚松軒入来、桜花一枝所望、

●十七日、雨下風吹、院月次称勞未進奉行(上冷泉)為則卿

閑院宮へ以使申出昨日之二通、

当番祀候、伺愚詠御月次御内会等、

廻文云、明日神影供自前夜相濟迄、服者不可參入事、如享和二年可心得、自来更ニ無示事、

千代丸云、明日影供御会名所春月之題ニ而、哥可詠試有仰、仍一首為見之、予聊加筆則勅点を被下由、亦為見云々、

雖御慰之義面目歟、

今夜甘相公明日依御用退出(甘黨等因是)非舞役只奉行中間(万里小路建房)万人弁依明日仙洞御用退出(禁中只ノ御人数)但自今夜(仙洞午後講師)構神事仍、左金吾(昼依院御用取集不參、宿依神事不參、)

狩野伊織依所望、妻紅古末広地十五通借遣之、

十八日、雨晚止、渡相勤退出、于時卯半許、

伝聞、内裏神影供御題名所春月、奉行胤定卿云々、(広橋)予非御人数、所役可尋、

(紙背文書)
「寛政十一年十二月十八日

院中御月次(後日附)

(上冷泉)

冬日同詠二首和歌

刑部大輔藤原公祐

炉火忘冬

しもゆきもわするゝはかり

の^{の脱カ}とけさハ春やへたてぬ

うつミ火のもと

忍久恋

忍ひつゝつらきなからの

としをへてなミたも今ハ

袖になれにき

「

(第七表)
(文化五年三月)
廿日、小雨已斜止、

自檀王清凉寺状来、菓子被送、先日参詣之為挨拶、

早旦退出、^(籍前)勸修寺拾遺

一昨日次第第二冊借請、

風早権介一昨日禁色仰詞借^之□、

入夜自九条殿御使来、一昨日之

為挨拶、且明日御所方御参賀之間、為御扶持可参、於領掌申者、辰半刻御出門之間、其已前御陸へ可参云々、謁御

使領掌、妙典院入来対面、

御陸立寄、日野亭以雜掌申置、下官中将小折紙、自庭田被伝由承之、闕之節者宜願披□、

四月小、日光東照宮奉幣使甘露寺右大弁相公、今朝出立云々、以使賀詞申送、

一日、丁卯、微雨時々降、

家僕并当用意、

辰半前、参九条殿冬袍指コ、以宇郷羽州申入、相次按察卿被参、

五位

今日御参賀御衣鉢之事、昨日按察被心付、冬袍ヲ召越哉否事、被談合於甘露寺、其上左府公へ御相談之所、今朝自

左府殿御返答、夏直衣可被召云々、是惣分へ御内談之事、雖一二孟旬日御直衣着給事、依撰閑家事歟、御治定歟、

先例二条殿・一条殿等春御元服後御参御例歟云々、可尋、已刻過御出門、其已前於小書院御対面有御挨拶之御詞、

次御先へ参内、無程御参於透垣内御下與御参入、御直衣二藍三重タスキ御越組掛緒御元服之日於御前御拜領云々、御奴袴此糸龜甲浮織紋、御横目、

車寄ノ階ヨリ兩人奉扶持、雖雲客、於殿中御出逢之時居テ御礼有之事、於端休息所、以近習雲客御口上被申上、時

按察殿被申之

節御伺、当日御祝義等御対面被伺处、

(第七十五)

今日無御対面云々、仍被仰置次御退出、端雲客松蔦杉戸辺迄御見送之時、居テ御礼節而御退下、初所迄奉扶持、御

催ノ

先へ参、中宮予謁、御肝煮内々尋云、御口上被仰置時者、以非藏人可被申哉、親王ノ陪膳衆へ可被申哉、豐岡大藏卿

(高貴)

被答云、以二親王ヲ催ノ雲客、一緒ニ被仰置、可然其共外ニ御用候へ、御肝煮可被出云々、仍於休息所南座、以小

倉中将被申置、(當日御礼時節伺、次御退出小倉御見送衝立之辺、於車寄前庭召御與、予中宮参賀之口上非藏人へ親王へも御同様ノ事)

為祝、以表使可申與事、次御先へ参仙洞、於休息所御口上、以梅小路次官被申上、被仰入也、評定唐橋召ニ被出、

二条中納言(高貴)中将殿与御一緒ニ御参入云々、暫時御退以評定御礼被仰上、御手水之時、予竹筒自御家来請取之奉仕之、御手水

兩人別ニ御里亭へハ不参由諸大夫へ

上北面奉上之、御退出御所方御様子、諸大夫按察被参語置、此後分散于時午刻也、

(在座)

伝聞、昨日院へ被召、裏付之御狩衣御拜領云々、御扶持依臨期、唐橋式部大輔昼後参二条殿、以西村主税頭申置、

此間九条殿御元服無事被為濟賀□、五条相公へ仰詞之写、内々書送依約諾也、

〔（補上書）見分記之、二条左府公与御息中納言中將殿、於途中御出逢、御息御輿下地上、御輿ノ戸ヲ引置計ニテ不被出也、

将一条右大臣殿与九条大夫殿御行逢、左右方不及御礼、只行合計也〕

■大宮侍從（入）従来、三十六哥仙之中、右朝忠絵板也、歌染筆事所望来十□迄ニ憑入由被定置、

自閑院宮諸大夫田中木工權頭状云、自来三日約候へ、当座暫不及参入、以使可申出云々、依御建添敷、

〔（紙背文書）享和元三廿八公宴 神影供御会

春日同詠藤花隨風

和歌

刑部大輔「藤原」公祐

むらさきのいろをみ

とりにふきませてはる

かせなひくまつのた

ちか枝

〔（第_八丁表）文化五年後六月八日以後）
勿論可参申旨答之、

抑今日於陶化内密尋諸大夫云、狩野縫殿助事、御当家御家来分敷、答云、縫殿助ト申名、先代へ自御当家賜候、代々為御家来分也、鶴沢探泉者如何、答云、於鶴沢者非御家来、但同様ニ御館入也、

●十四日、雨午後止、入夜又降、

早旦、飛大(飛鳥井雅盛)へ送状云、今日御文庫入改、雨儀之躰、若如何若後雖雨止地湿之間如何、返事云、尤無参仕、若刻雖刻

限過晴ニ移リ、自議奏被示候ハ、早々可被告明、明日ニ相成者、左金吾可有参仕間、不及勤仕之、

尹宮へ以使、院月次相見申使、晚景参内伺之所、追而可返給云々、

於省中一覽 石清水御法楽和歌御延引之事(飛鳥井雅光)

入夜倚松軒入来、清談、

狩野伊織兩度来、内談之事有之、

(第八十裏)
十五日、朝雨、午後属晴、所々へ送柏餅、今日官庫移替有之云々、

住吉社先成年焼亡之間、今度造営ニ付番附之事申来、仍乍聊進之三兩五分計三条小橋辺也、是当家小禄困窮必至之間

難事行、雖然、異他御社之義、以別願所沙汰也、倚松軒入来、

●十六日、陰晴、

未過兵衛内侍退出、依月事也、自先日

十七日、晴、当番昼間治部権大輔へ番代宿依所勞不参(行童 石井へ遷所又代也)切帝徳大寺承知云々、

今日中勝手可参内被触、未計祀候云々、夏袍良久賜、院哥御点了退出、于時申刻、(上冷泉)左金吾為則亭へ付云々、料幣中高
自兵衛到来、

夏日同詠二首和歌

右近衛権少将藤原公祐

夏山残花

なつまでもうつろひ残る

さくらはな此山かせは

いかゝよぎけん

一(紙背文書)

春日同詠松千春友

和歌

刑部大輔藤原公祐

とかかへりのほるもへ

ぬへぎほりのまつきみ

かことはなをた

めしに

「

(第廿五表)

野外眺望

はるかなるかわはらのまの
ゆふ日かけくもりてみゆる

水の一すち

夜半後兵衛内侍帰参、

●十八日、晴、

(藤政)

歌仙中納言朝忠讀、自大宮所望之間書送、尾張国津嶋社奉納云々、

●十九日、晴、夕景陰、

右府(萬倉)藏

今日祭也。近衛使■權中将公師朝臣卅四才、色目等後日借写於良季朝臣許、

冠垂纓、闊腋袍、盧橘半比、同下重、紅草、赤帷、表袴打、赤大口、

犀角巡方帶付銀魚袋、鎧劔、紫縫平緒、笏、帖紙紅薄、夏扇、

浅沓乘馬之時、用靴

鎧車風流、牛童赤色上下付蝶白、

私之左右前後ニ有之、

(第廿六表) 右方上臈也

櫛官人 左將曹奏武、逸袴付拍、私之袖結ニ付敷、其形小形如サデノ

在下屬也
右府生源意誠袴付拍、小形也、

鎧馬 唐鞍金地、表敷錦地、鍔輪、力革紺地、轡金銅、銀面菖蒲形

角袋紺地、尾袋銀地紋花、雲珠、頸総金銅鉢中ニ有鈴、八子赤滑
崎金有鈴

錦表腹帶、白布腹帶、大滑紺地、黃伏輪金、革鞞搦蝶

杏葉白皮、手綱蘇芳縹
黃伏輪

綾差繩蘇芳白、鞍覆蒲萄染
打交

舍人一人 平礼 二藍上下付牡丹、紅衣、白生單、乱緒符衣紐

副舍人一人 細烏帽、萌木水干、白葛袴、帷、

居飼一人 細烏帽、退紅、白布帶、黑袴、懸鞍覆、

馬副四人 冠細卷綾、綖細卷綾、褐衣差袖結村濃、白袴、白布帶、濃單、藁脛巾乱

隨身四人 冠細卷綾、綖細卷綾、褐衣熊鷹、白布帶、青半比、同下重、紅單、

朽葉末濃袴、黒作劍藍草裝束、平文赤懸緒、差鞭黒漆、藁脛巾、

浅沓、

〔紙背文書〕
〔寛政十二〕三十八院御月次

春日同詠二首和歌

刑部大輔藤原公祐

花下見月

いつか又かゝるたひねに
あかす見むおほろ月よの
花のしたかけ

寄車恋

うしやなをいつとかまたむ
にくるまのめつるもかたき
中のちきりは
「

(第十妻)
手振十人

冠細巻綬
挿頭葵、綬、麴塵褐、白布帶、青半比、同下重、紅單、
青末濃袴、藁脛巾、乱緒、

一 三雲珠、五笏篋、七水篋、九豹皮
二 四頸総、六鞭篋、八胡床、十毯代

權官人

右將曹身人部清貞袴付
棕雄
左府生身人部清矩袴付
籠物

牽馬

倭鞍梨地、薛繪、表敷赤地、錦、切付豹皮、泥障熊皮、鍔舌長、梨地、薛繪、轡鏡、

紅綵鞞、靱負鞞、紫綵綾手綱、綾打交差繩蘇芳、白、

鞍覆萌木、薄物、以色々糸有縫物、

舍人一人 平礼朽葉上下付金箔、蓼文、副舍人一人細烏帽、紺葛袴、白水干、帷、居飼一人同上、

小舍人童二人 不結髮不物忌、揮頭髮、朽葉頭文紗上下紋松唐艸、付藤丸、萌木衣、白生單、扇驅蝠、毛沓、

雜色四人 礼帽、萌木上下付瞿麥、丸、白布帶、紅梅衣、白生單、乱緒、

執物舍人四人 細烏帽、萌木当色如雜色、一雨衣、二行騰、三深沓、四傘、

張唐物、紋牡丹花紫、枝紫青、帽額花田唐綾、有綵青末濃、

風流笠

中央立瞿麦花、

(第十卷)

禁中儀着沓舞踏云々、失敷、已半計進發、於鴨詠宣命事、撤御幣物後、可詠覺悟ニテ良久見合之云々、且又失敷、鴨進

發申刻前、賀茂義成計訖、帰京戌計云々、亥

再興事、櫛隨身風流、隨身已下半比下重、

内蔵使 種田、手振十二人、笠牡丹、

山城使 斎藤、

馬寮右馬大允大嶋、

〔紙背文書〕
寛政十二年三月十八日公宴 神影供御会

春日同詠松樹増色

和歌

刑部大輔藤原公祐

わかきみかけふのた

むけのことはにまつ

もひとしほ色をそ

ふらし

〔第十丁表〕
左仲呼寄伊織事語伝将有了簡、

廿日、晴、

朝之間参、尹宮御内会下見入見参明朝可申
出事中置、参陶化頃之佳肴拝受之謝義申置、四五軒中元、返礼罷向了、帰蓬、

芝山へ下見之礼罷向了、

晚景有召参内、鴨哥賜御点、酉刻過退出、付烏〔烏丸實重〕
黄門許詠進之、

仲夏 さまたれのはるゝとハなき雲まにも
たえずかたらふやまほとゝきす 公祐

廿一日、晴、依当番祓候、早朝以使尹宮へ申出、公宴哥持参之、伺勅点、千代丸出云、親王御方柿実御所望之間可進上云々、

伝聞、頃之於清水随(マ)堂、関東芝泉(岳)ガク寺什物、四十七人之義士之武器・仏像等為拜云々、卅ケ日云々、
今朝(狩野)伊織来、種々進退諷諫了、

廿二日、陰、早旦退出、入夜倚松入来、

●朝廿三日、雨下、

伊織来、再三諷諫進退事、本人先非撤心肝悔之、万事可随父命由申之間、召実父左仲語之、
(第十一丁裏)廿四日、陰、昼後雨下、兵衛局へあん餅二重送遣、

狩野伊織今日立帰於左仲方予裏小屋、



廿五日、雨下、

●廿六日、晴、

雲峰院尽七日引上修法事、施餓鬼已計参詣了、
但不詣墓所 今日可有召敷仍也東対同参詣、予早出於私宅人々相招昼時委在別記、

晚景月番頭圍狀云、御内会詠進如何云々、御点之御沙汰。無之間、^未先未進之分ニ取計、可然見合居、^{其上}彼是。連々之由答申、

廿七日、晴、依番参内、午刻 御内会哥、昨日可返給所御失念之間、今日返被下由、以善丸被仰下、則書之付清閑寺上云々、

松 虫

公祐上

花さけハまかきものへの夕つゆにやとりとりけるまつむしのこゑ

鈴 虫

かねてよりふりゆく秋をうらミてやなくこゑしおる野へのすゝむし

(紙背文書)
享和元二廿四閑院宮会始

春日詠園春草

和歌

刑部大輔公祐

もえいつるまたきわ

か葉のはつくさをいつ

花そのゝ色にみ

わかむ

「

(第十二表)

留守中倚松軒入来、山本家父子之間事、倚松所存為相談入来之由、了真尼今日昼後自歸局歸此亭、

廿八日、晴、

了真已計青門へ参入、而歸水薬師先無異、

今日梶井殿立親王

宣下、陳上卿飛鳥井大納言、

(雅説)

弁日野西左中弁、

(延光)

(驚尾) 頭中將

奉行隆純朝□□法親王ハ無勅別当云々、

内々御使、禁中勸修寺侍從、院中西洞院少納言、中宮大宮侍從、親王久世少將、

飯酒等之有設、家僕へハ侍分計飯出之、主人吸物九云々、各脚打ノアシライ云々、

即日宮被参賀云々、

御挨拶禁中御使へハ銀二枚、引合十帖、

尤外ニ馬代銀一枚ハ返ル也云々、

院使へハ銀、

中宮使へハ銀一枚、引合十帖、

親王使へハ銀一枚計云々、

已半計、入江左京権亮来、為前槐使今朝已来之様子被示越、且今日も可参集云々、昼後向三条兩度、

(第十二裏)

朱印之事相済、先一統安心、

■

入夜亥過帰宅、

廿九日、晴陰、番屋間祓候、

酒中花一筥付愚息猷親王御方、是先日自関東到来之一箱[□]実貫之所、不計上親王御方、今少可異哉之由被仰聞、

又所上申候、

但愚息不罷出間、以江坂申込、入夜退出、

留守中梅園^(実兄)入来被定置云々、水薬師へ遣使、昨日無事帰寺、弥無障哉、

尋遣処、先無別条由有返事、

田中典膳ヨリ願之義、

伊織名代左仲来、

(紙背文書)
一 冬日同詠三首和歌

(追筆)
刑部大輔「藤原」公祐

松霜

かけたかくいくよへぬらむ

とかへりのしもの花さく

庭のまつか枝

千鳥

すまのうらのせきちはるかに

立ちとりこゑの行衛や

淡路しま山

庭竹

┐

(第十三卷)

文化五年十二月
ちるはなの

月もこゝろの

ゆきこそにはへ

うへもすむらめ

しかのふるミち

権少将公祐

入夜倚松軒入来、

二日、晴、敏姫誕日也、小豆餅祝、

三日、晴、追而毎度無人候間、必御断無之様可被相催候、近習衆へも可被触候也、

来十三日常御殿御煤払候、卯刻無遅々殿上人衆参集、可被相催候、参否之輩十二日午剋迄御書付可被示聞候也、

十二月一日

右之通唯今被示候、仍入見参候、御参否御名下ニ御書付給、早々御廻覧可返給候也、

十二月二日

(高辻)
福長

〔(欄上)今日上冷為則卿息元服〕

日野西右大弁殿承候、

(豐季)小倉中將殿

(供秀)桜井少將殿、承候、依所勞不能参勤候、

大内記殿

高松少將殿承可参勤候、宜御沙汰差入者也、

周防權守殿承候、令参勤候了、

裏辻大夫殿

今夜内侍所御神楽云々、有出御御当櫛了、還御云々、寅刻事訖云々、

尹宮当座題申出、眺望、

こゝろあての山のあなたニみゆる哉
入日をひたすよとの川ミツ

公祐

後日伺申之後清書了、

池尻(塲房)前相公入来、被語云々、

(脱テアル之)第二女マサル大坂天満社家へ縁組治定、

来十三四日比可引越云々、武者小路入来、中將国

(第十三丁裏)ニ付、例ニカナヒ候間、

今年ヨリ小折紙申出置度、仍今度之所、予引可給哉、

来年ヨリハ隔年ニテ可致入臨云々、尚自是可返事申答、

四日、晴、入夜微雨、昼後所々へ寒中相廻、山本・倚松軒・滋野井等ニテ対面、入夜更詣両地藏献繪馬、寄高向太物

借宅有馳走、

今日陣饑内官今出川大納言、外官山科中納言云々、

五日、晴、自川鱸三品回文、自明六日小番出仕之事、冷泉大夫為元服礼被定置、昼後向三条(公修)相面会、武衛、羽林、

中將申度、入魂有之事語申、

將予非。謂武衛之庶家子細語申、

向武衛依留守、以右中殘置、中將今度關、予引間、勝手ニ可被申事、自來年者、隔番ニ可致事等

〔紙背文書〕

冬日同詠三首和歌

右近衛權少將藤原公祐

尋殘紅葉

しくれゆくさとより里に

たつねみんちりのこる秋の

色もありやと

不逢恋

あふまてのいのちもかねて

しらぬ身にはかなく人や

何おもふらむ

(第十四卷)
二人宛掛之、

留守中花園權介入來、依參内中、明日、明後日之中、又可被來被定置云々、

兩寺へ代參
●十三日、陰、早旦退出、 閑院宮ハ当座式日之間、題申出所、御用多間被延引云々、

自院廻文 河辺螢

前日御詠進之事、

寄垣恋

右月次御会題各可令詠進給之旨、 院御気色候也、

五月十日

(飛鳥井)
雅威

油小路前大納言殿——高松少將殿奉——冷泉大夫殿

花園美作權介來臨、家領朱印落手後分配之事、自入殿度々催促有之、可如何様哉、一家へ被尋^{尤三条ヨリ茂}予所存^{知行之}事^{誰不知案内}、十石乃至十五石入殿へ被送、自余可被領然歟者、權介云、治定後入殿へ送進之節、猶又嚴重ニ後諸約置度、一家心^{追加無之様}添取計憑度云々、

廻文、去四月十五日、石清水社御法衆和哥、明後日十五日被読上之間、前日御詠進之事、

(飛鳥井)
雅光

(欄上文)
「伝聞、仁和寺殿附弟、青蓮院附弟等、此比ハ養子ノ御弘メアリ、別日云々、以里殿有栖川^{伏見}為宮ノ里亭云々、御服者
兩宮共民部卿典侍猶子也、表向不及御使云々」

●今宮へ代参
十四日、晴、

(第十四丁亥)

(由説方)

自宮中今日中可参被触、申半許参之、去月石清水之哥賜勅点了、退出即付雅光卿亭、献清書、

夏岡篠 秋きてハかりそめふしもいかならむ

いまより露のをかのさゝハら 公祐

清閑寺大夫入来、明後日閑院若宮叙品宣下、為御賀使間、進退被尋粗、四辻為林ニ雖存知、一度ハ予へ可尋故被示、仍入来云々、愚存之趣諷諫了、

十五日、晴陰、

早天行水、詣今宮御旅所異躰神輿前拜了、早々帰宅、更着衣袍、参閑院宮、今日寿宮被加首服間所賀也、早々帰店、于時辰計也、

伝聞、辰刻為吉時云々、加冠内大臣基前公着座、広橋大納言胤定、

別当実光卿、

石井相公行宣卿、

扶持公卿中宮大夫

公修卿

勅別当人也、理髪頭弁資愛朝臣、役送雲客、国豊朝臣、

前物陪膳、平松、時門朝臣、

家司、石井大膳権大夫行弘朝臣、

御参始、連軒、広大、行弘朝臣、隆祐

寢殿代於母屋簾中有之云々、庇ニ有公卿着座云々、

無勸盃之義云々、被任常陸大守云々、

(紙背文書)
春日同詠二首和歌

刑部大輔藤原公祐

朝雲雀

あさまたき霞と友に

たつひはりやかて雲るに

遠さかるこゑ

巖頭苔

さゝれ石の昔をとへハ

いく世ともいはほかうへは

苔のみたれて

(第十五丁裏)

今夜御月次被伺置衆被召御点被下云々、明後日之御法楽ハ未被返下云々、今日桜町院聖忌仍敷云々、
留守中花園権介被来、依参内中書付被残置云々、

●廿四日、晴、早旦退出、

今日中御門侍從經定卅才、奏侍中之慶云々、今朝有禁色宣下云々、
入夜自九条殿持廻云、

只今從四位下宣下 御大慶被成候、仍御知七被仰入候、已上、

四月廿四日

芝式部權少輔

門流連名承候、

倚松入来、

祥台院入来、已前了真参入中宮云々、

左仲娘明日山科郷々士嫁入ニ付、為祝金百疋^予、東^{券印}帶地一卷、蔣工二卷文画等送遣之、

廿五日、晴、

〔第十五卷〕

大宮侍從入来、来月七日有栖川宮元服ニ付、自禁中御使被承進退有相談、粗申答之、

晚景参九条殿、以宇郷出羽守、昨日御位階御昇進之御悦申置、

且諸大夫中へ入魂、若中将關之節、被仰望時ハ、公祐小折帟勿論可扣申間、已前ニ内へ為知之事憑申、宇郷承知也、

●廿六日、晴、御内会未進、了真参兵衛局、今夜可一宿云々、

花園權介宅へ以使此間入来之返礼、且書付之趣承知之事申之、

勧修寺拾遣入来、来廿八日梶井殿立親王宣下ニ付、内々勅使被奉間、進退被尋之、粗申含了、

廿七日、晴、

前内府公使入江左京權亮来対面、花園事也、

(紙背文書)
「寛政十二」五十八 院月次御会

夏日同詠二首和歌

刑部大輔藤原公祐

朝早苗

さなへとるむかひの山に
いつる日のひかりもすゝし
をたのあさつゆ

夕思出恋

ちきりをきし昔のゆめの
名残さへ身におもひしる
ゆふくれの雨

(第十丁表)

冠、綬、不出鬢輻、袍 下重冬、裾、単、表袴、大口、襪、

帖

馬瑠丸鞆帶、細剣、平緒紫緒唐花、浅沓二足

隨身二人朽葉袴浅沓、壺、小舎人童一人蘇芳、黄草、横目扇、

白丁四人、轆丁六人自九ヒキ、笠籠、押等如例、
笠持一人

廿八日、晴陰不定、

今日九条殿若君御兩儀若元服也、

已計着束帶乘轆無後戸参入、於四脚門外下轆参入、

俗用意、足袋一、草リ五

市女五、簀笠六、笠籠ノ桐

箱挑灯二、馬挑灯一、重ノ

轆簾三枚、雨皮、結布連著

先参内之方以諸大夫賀詞申云々、被下御祝所役者雜煮、三献、非役ノ赤飯三朝湯漬、

冠儀已刻過被始、未刻計訖、

晴ハ三分五リツ、借
ミのかさ

雨ハ七分

ロウソク十丁

前後仕度 令丁

侍四両三分ツ、
白丁六人五人□七阿□

下部二両八分ッ、袍阿野
五人

帶阿野

押四両

壺胡六阿野

若者

市女二梅園

沓 阿野

左大将殿政通卿来給(鷹司)直衣、紅打衣、
別当(正親町)実光直衣白衣同単、
中山中納言(忠頼)直衣衣単不見可尋、
侍從宰相(第十六下侍)為訓束帶薄色衣等着座、
殿上人頭中將隆純朝臣已下着座、

(紙背文書)
一享和元七十八 院月次

秋日同詠二首和歌

刑部大輔藤原公祐

残暑

いつしかと萩のうは葉に
おとろけとみにしむ程の
秋かせはなし

寄衣恋

あいことはいつとちきり□

こひころもうらみはかり□(をカ)

身にかさぬらむ

「

(第十七表)

已刻陳儀兩度有之云々、有栖川アケノ宮、上卿徳大寺大納言、弁明光、勅別当広幡大納言、閑院^{ヒサ}寿宮、上卿大炊^{ヒサ}大

納言、弁俊明、勅別当中宮大夫、各奉行資愛朝臣、(日野)

未半刻過、有栖川宮へ御使進発、

申刻比、大藏卿被参、予閑院宮へ進発^{先之添使へ進発申渡}、相次豊岡進発、

申刻比参向、閑院宮先供配込如例、但添使不出迎、

於^大書院休息、勅使四辻^{公方}中將、院使橋本侍従、中宮使予、儲君使豊岡権頭、各相揃後、以諸大夫申入、御取持六条

前中納言已下被謁十人計、召渡使受取目六、

暫時若宮被対面、直ニ対座小書院ノ上ノ間口上申伝、今日立親王宣下、目出度思召候、右ニ付、目六之通贈給候、

自懷中目六ヲ取出伝申、寿宮御返事被申上、時節伺詞等有之、(欄上文)「父宮へ無御出座」中宮大夫被扶持之、時節伺事、有無可為如何様、内々三条ヨリ園池迄

有尋由被宗間、近世次問迄被送、予下席而恐悦申述、退下呼出、添使渡文画、可帰参事申渡、勅別当挨拶ニ被出逢早出

アリ、賜祝赤飯吸物^{三献了}、次飯^{種々込}三二汁五菜、中酒吸物三献了、ムシクワシ濃茶、又ムシクワシ二色、包罷帰、薄茶了、

五段吸物五ツ、肴等酢ノ物水ノ物取出持、各盃ヲ所望アリ、相送了、(欄上文)「各三渡也、

云々、但吸物ハ有宮ハ三云々」(栖川脱カ)

以上吸物五ツ也、以諸大夫御礼申置、且自分ノ恐悦被申置、一人ノ退出、御取持五六人表ノ廊下杉戸迄被送、一家来侍分ハ赤飯祝酒被出下申ハ無之、仍時刻過間、四辻被下申合、内々御取持ノ中石井へ入院、諸大夫へ頼取計之義、下部へハニキリ飯、侍分へハ弁当被出了、

一挑灯之義及暮間、取ニ遣、箱二張而已也、

戌刻前帰参、中宮請取文画、謁御肝煎豊岡御返事申述、文画返入、

暫時退出之義、被参芝山、添使退出候事、為申渡且掲□出退事、

已後可心付申置、本人へ且芝山へも届置、

伝聞、有宮ハ申半比ニ御使被帰参云々、

戌半過退出、

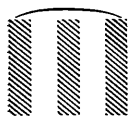
今日、借物、網代輿、川崎三位 兵衛局 同同雨具、同看板帶共、同同雨具合羽、

用意ノ品々、沓三足、上ノ綴、末広、紙入、キセル、たはこ、太刀、袍、奴袴、延紙、柄枝、

輿フトン、献上太刀、ゆかた一枚、薄奉書一枚、白紅一枚把、銀一枚、長柄笠笠合羽合羽、下部菅笠是へ依破損、箱

挑灯二ロウソク、

侍ノ雨具是ハ面々持来、下部輿者等ノ笠、是モ同断、承人ノ下部ノ合羽、前後飯菜、侍分・下部分等輿者ハ不遣、有栖川宮へ御勅使鷲尾中将、院使野宮少将、中宮使大宮侍従、儲君使芝山宮内大輔等也、





両宮共宣旨史持参之、勅别当前覽次若宮被見之云々、

自禁中

直衣也

閑宮帶屋御世話六条前中納言云々、御取持久世前大、芝山父子、石井父子、子息へ家司云々園池父子、八条父子、櫛笥等也、

有宮へ自宮御頼ニテ正(親)キ町别当被参云々、御取持可尋、

諸役宮々へ被招如御使ノ節、有饗応云々、

有栖川殿

韶仁ハナハ

閑院殿

孝仁タカミ

(紙背文書)
「春日同詠春曙眺望」

和歌

右近衛権少将

(追筆)
「藤原」公祐

いはみのたなきたる

はるのあけほのゝな

みまにしらむ高角

のやま

「